



連載 資産運用「茶飲み話」(4)

岡本 和久



運の良い会社の見分け方：まず、経営者は「開眉仰月口」か？

道教に「開眉仰月口」は開運の秘訣という教えがあります。眉を開き、月を仰ぐような口をしていると良いことがどんどん起こるといいます。

その反対は「寄眉覆船口」。こちらは眉を寄せて船が転覆したような口をしている人で、こういう人からは運が逃げていきます。

言われてみればその通り。誰でも左側のような顔の人とは仲良くしたいけど、右側のような顔の人とは近づきたくないですね。つまり、この教えは「良い顔の人は良いことがあるから良い顔をしているのではない。良い顔をしていると自然に良いことが寄ってくるのだ」ということなのです。



開眉仰月口



寄眉覆船口

運の良い会社を発見するためのひとつの方法は企業トップの顔を見ることです。そして従業員の顔です。みんなが「開眉仰月口」であればその企業はどんどん運をつかむこと請け合い。長期投資にも適していることでしょう。こんな視点も銘柄選択で大切なのではないのでしょうか。

バブルのピークでは全員が長期投資家になる

バブルがピークに近づいた時にアンケートをとると、ほとんどの投資家が「まあ、マーケットは時々下がることもあるけど、長期に見れば上昇を続けるもんだ。だから、私は少々の下げにびくびくすることなく、じっくりと長期投資を続けるよ」というようなことを言うものです。みんな、マーケットはずっと上昇を続けると確信しているからこのような発言にな



長期投資仲間通信「インベストライフ」

るのでしょうか。

相場が良い時に長期投資を口にするのは誰でもできます。そんな時は逆に危ないのです。

で、いまは？2013年の大幅な上昇を見て少し株式マインドは良くなっていると思います。しかし、それはまだまだほんの一部の短期売買が好きな方が多いのが現状でしょう。多くの方は、将来が不安、貯金をしているだけというのも不安、でも株式投資も不安という方が圧倒的です。短期取引の方ですら以下のような声を良く聞きます。

- 「どうせ、株なんて上がりっこない。株なんかやるより FXの方がずっと効率がいいし面白い」
- 「株式市場は狭いレンジでしか動かない。時々、面白そうな銘柄があったら、『早乗り、早降り』に限る」
- 「日本はもう成長しないだろう。株価と経済規模は大体平行だから日本株はもうだめだ」
- 「人口も減るし高齢化している。持続的に儲かる企業もなくなった。だから株式も短期で売買をしなければ危ない！」

本当に難しいのは相場が悪い時に長期投資を始めることです。そして、長期で報われるのは、環境の悪い時に行動をとった人たちだということです。以下のような注意点を頭に置いておけば安心だと思います。

- ✓ 一度に買わないでゆっくりと積み立て投資をする
- ✓ 一時的に大きな暴落があっても致命的にならない金額を株式に割り当てる
- ✓ 日本株だけでなく世界全体の株式指数に連動するインデックス投信を買う
- ✓ あまり株価を見ない

アセット・アロケーションを真剣に考える人ほどインデックス運用を使う

インデックス運用は、「パッシブ運用」と言われるように、何か消極的な投資であるような印象があります。しかし、実は、インデックス運用を使う人ほど、さまざまなインデックスをどのように組み合わせるかという「アセット・アロケーション」を真剣に考えている人たちなのです。

アクティブ運用のパフォーマンスは「市場パフォーマンス±アルファ」です。うまくいけばリターンは高いが、逆にいけば市場リターンよりも低くなってしまいます。当然のことなが



長期投資仲間通信「インベストライフ」

ら、市場平均の動きからは乖離します。

ポートフォリオの長期的なパフォーマンスは「アセット・アロケーション」が大部分を決定します。将来に向けて自分がどのようなリターンを狙うかを決めるときは、当然、国内外の株式や債券の指数を前提にその組合せ、つまり、アセット・アロケーションを決めます。これが資産の設計図です。

その次に、投資商品を部品として設計図通りに組み立ててポートフォリオを作ります。その時、部品である投資商品が指数と異なる動きをしていたらどうなるでしょう。せっかく作った設計図とは異なるパフォーマンスが生れてしまう可能性が大です。

長期的パフォーマンスの決め手であるアセット・アロケーションを真剣に考えるほど、その部品である投資商品はインデックス型のものにならざるを得ないのです。

『トーシカ・ホイホイ』にご用心

証券会社や銀行の営業マンが投信を勧めてきます。

「この投信はとても人気があります。値動きも堅調で面白そうです」と熱心に勧めます。「よし、それでは一口乗ってみようか」という訳で100万円を投資します。

それがうまく値上がりします。100万円が三ヶ月で110万円になりました。悪くない！もうけの10万円で温泉行っておいしいものを飲んだり食べたりして、ハッピー！そして10万円を使い切るとまた、元手の100万円を別の投信に投資して再挑戦となります。

しかし、うまくいかないこともある。

残念ながら100万円が70万円になってしまった。「しょうがない。これはしばらく塩漬けだな・・・」。

営業マンもしばらくはおとなしい。しかし、そこは営業マン。ほとぼりが冷めたころにはまた、「新しい投信がでます。今度こそはいけそうです。前回のロスを取り返しましょう！」などとアプローチしてきます。「本当かよ」とは思いつつも、やっぱり成功したときの楽しい思い出が頭をよぎり、「じゃあ、やってみるか」ということになる。しかし、今度も値下がり・・・。



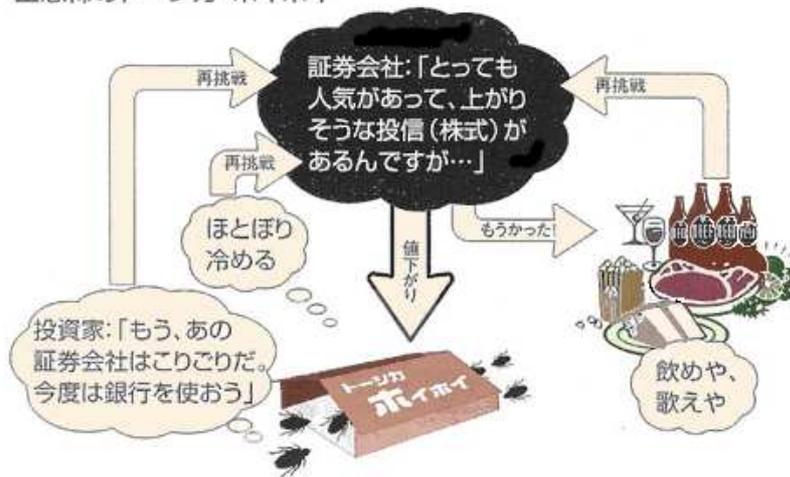
長期投資仲間通信「インベストライフ」

そしてこれが数回、続きます。そうするとさすがに人の良いお客も頭にくる。

「もう、あの証券会社とは付き合わない。今度は別の銀行でやろう」ということになります。かくしてA証券のお客はB銀行のお客になり、B銀行のお客はC証券のお客になり、C証券のお客はA証券のお客となる。

そしてまた、同じプロセスが始まるのです。こうして値下がりで苦しむ投資家がどんどん増えていきます。まるでゴキブリ・ホイホイならぬ「トーシカ・ホイホイ」です。

■恐怖のトーシカ・ホイホイ



この「トーシカ・ホイホイ」のワナはどこにあるのでしょうか。まず、「人気がある」というのは「みんなが買った」、つまり、「これ以上、買う人が減っている」ということです。それから「値動きが堅調」というのも「いま、上がっている」ということです。だから目標値が近づいてきている。つまり、これ以上、上値の余地が減っているということなのです。

でも、「この投信は人気がありません。値段も全然、動かず上がる気配もありません。だから買ってみませんか？」では商売にならないのです。やっぱり、景気よく「人気があって値上がりしている」方が売りやすい。つまり、売る側が売りやすい商品ほど高値づかみになりやすいという皮肉な、しかし厳然たる事実があるのです。その結果、「トーシカ・ホイホイ」はいつも満員御礼となっているのです。大切なことは自分の判断で投資を決めることに尽きます。